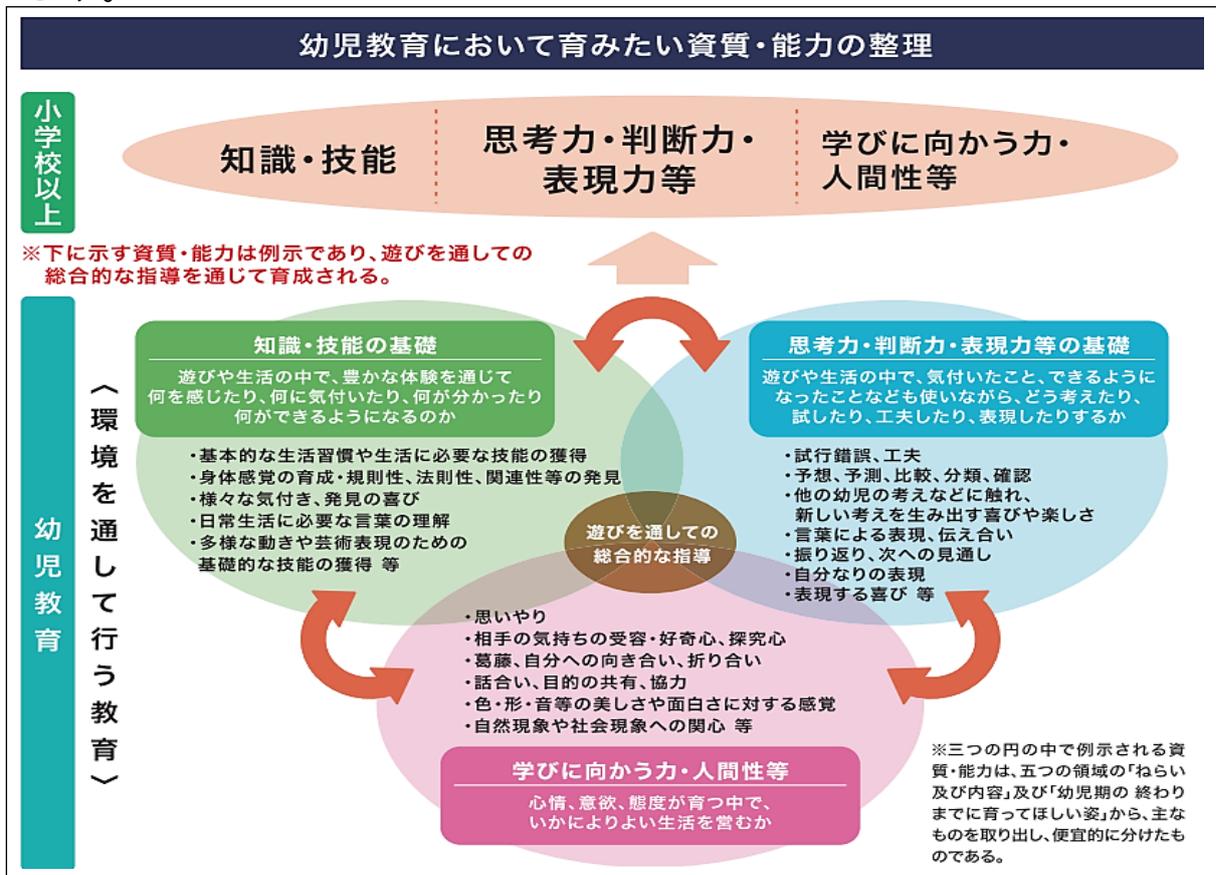


(2) 資質・能力の三つの柱

幼児期は、人間形成の基盤となる時期のため、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」のように、基礎という言葉で表現されています。しかし、「学びに向かう力、人間性等」では、児童期以降と同じ表現となっています。

幼児教育では、三つの円が重なり合い、両方の矢印で示されているように、それぞれ系列立てて育てるものではなく、順序性もなく育まれていくものです。様々な遊びを経験する中で「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が育まれていきます。



幼児教育において育みたい資質・能力の整理（文部科学省）

(3) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るために、幼稚園教育要領等で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、子供の姿を共有することが大切です。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、三つの資質・能力（知識及び技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力、人間



性等)が保育内容の5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)において、幼児期の終わりにどのような具体的な姿として表れるかを示したものです。

幼児期と児童期の円滑な接続に向けて、幼児教育施設と小学校間での交流活動や、小学校でのスタートカリキュラムの作成・実施などの取組が進みつつある一方で、形式的な連携にとどまっているといった課題も見受けられます。地域の実態や子供たち一人一人の育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに共有し、双方の教育の充実を図りながら、教育内容をつなげる実践が重要となります。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」留意点

- ✓ 到達すべき目標ではありません。(定量的に評価するものではありません。)
- ✓ 個別に取り出して指導するものではありません。
- ✓ 全ての子供に同じように見られるものではありません。
- ✓ 5歳児に突然見られるものではありません。(長い育ちの中で現れるものです。)



4 架け橋期カリキュラム作成に向けて

カリキュラム作成に当たっては、幼保小の先生が、共通の視点を持ちながら、相互の教育内容や教育方法の充実を図るために協働して作成することが求められていますが、市町村や幼保小それぞれの実態等により、作成への取組が円滑に進まない状況も考えられます。そこで、**まずは、幼保小それぞれにおいて、現在のアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの見直し、改善を図りましょう。そして、最終的には幼保小で協働して作成する接続期のカリキュラム作成へ移行しましょう。**

アプローチカリキュラム

※現在作成されているカリキュラムの見直し・改善に御活用ください。

(1) アプローチカリキュラムとは

就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに、幼児期の学びが小学校の生活や学習に生かされ、つながるように工夫された5歳児のカリキュラムのことです。

(2) アプローチカリキュラムのねらい

アプローチカリキュラムには、以下のようなねらいがあります。このようなねらいについて、園所全体で共通理解を図り、全職員で幼児教育と小学校教育の円滑な接続を実現することが大切です。

- ✓ 学びの芽生えを大切にした活動を通して、知的好奇心を育み、自ら学ぶことができるようにします。
- ✓ 協同的な学びを通して、人とのつながりを実感し、友達と共に目標を達成する喜びを感じることができるようになります。
- ✓ 自立心を高める活動を通して、成長を実感し、自信をもって新しい生活をつくり、安心して就学できるようにします。



(3) アプローチカリキュラムで大切にしたい活動

年長児の発達特性を踏まえ、アプローチカリキュラムには、小学校のスタートカリキュラムにつながる活動の三つの柱を位置付けましょう。

- I 「学びの芽生え」を大切にした活動の充実
- II 協同的な遊びや体験の充実
- III 自立心を高め新しい生活をつくり、安心して就学を迎えられる活動の充実



I 「学びの芽生え」を大切にした活動の充実

学びの芽生えとは、学ぶことを意識しているわけではありませんが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、結果的に様々なことを学んでいる姿のことです。子供は、遊びに没頭する中で、気付いたり、できるようになったりし、知識や技能の幅を広げていきます。また、「もっとこうしたい」「こうなりたい」という思いや願いをもち、試し

たり、工夫したりする中で、思考力の基礎を育てていきます。思いや願いの実現に向けて、問題を解決しなければならない場面では、これまでの経験で知っている知識や技能を組み合わせ、友達と協同して問題を解決しようとしています。

その場で解決できない問題については、自分で調べたり、人に尋ねたり、繰り返し取り組んだりして、粘り強く解決しようと努力します。やりたいことに向けてがんばる経験を積み重ね、達成感や満足感を得ることで学びに向かう力が育まれ、小学校以降の自覚的な学びにつながっていくのです。

「学びの芽生え」を大切にした活動を充実させるには、遊びの中で子供が興味や関心を示したことや夢中で取り組んでいることをしっかり捉えることが大切です。また、普段の遊びや生活の中での活動が、どのような学びにつながっていくのかを見取る保育者の目も大切です。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとすることで、目の前の子供の活動が、どのような学びの可能性をもっているのかを考えるヒントになります。



II 協同的な遊びや体験の充実

年長児は、個人差はあるものの、発達段階として気の合った仲間同士の活動だけでなく、クラスで共通の目的を意識したり、自分の役割を理解したりして「集団の一員としての自覚」をもって活動するようになります。一つの目的に向かって、グループやクラスなどの集団で取り組む活動の中で、みんなで協力し合うことの楽しさや、ルールの大切さを感じたり、責任感、達成感を味わったりし、集団の一員としてのつながりを自覚するようになります。

